

〔先哲叢談後編一〕三宅寄齋

寄齋資性謙虛退讓自將、不敢欲名高、雖然聞其操行、慕附者衆矣、特與藤惺窩交情最密、惺窩長子寄齋十九歲、而能愛敬之、稱以爲謙厚君子、

〔近世畸人傳一〕貝原益軒

益軒貝原氏、諱篤信、略○中その學博く和漢に亘れること、等輩尠しといへども、性甚謙にして、只身の及ぶることを恐れ、名に近づくことを喜ばず、常に言吾人に長たることなし、但恭默道を思ふのみと、

〔閑散餘録附録〕或人ノ話ニイフ、先生益軒○貝原諸國ヲ巡リ、歸國ノ海路ニテ、同船數輩各姓名ヲトヒ

キクニモ及バズ、何トナキ物語ドモヲシテ、日ヲ重テシニ、其中一人ノ若キ男、人々ニ對シテ、經書ヲ講ズ、先生例ノ恭々シク默シテコレヲ聽テ、一言是非ヲ論ゼズ、著岸シテ、各ハジメテ其郷里ヲ明シ、再會ヲ契テ別ル、ニ臨ミ、先生モ吾ハ貝原久兵衛ト申者也ト、名ノラル、ヲ聞テ、彼ノ若キ男、大キニ恥オンレテ、速ニニゲサリシトナン、傳ニハ見エザレ共、其爲人ノ一端ヲミルベシ、

〔桃源遺事五〕越後の光長朝臣の、御家中騷動につき、家臣萩田主馬、小栗美作を江戸の御城へめし、御前におゐて、對決仰付られ候節、綱豊卿甲府御三家の御方も、其席に御詰被遊候處に、此席の御座配は、御三家の下へ、綱豊卿御著座の筈の處に、西山公光園○徳川達て仰られ、御座を綱豊卿へ御ゆづり、西山公は次の座に御著被成候、此時綱豊卿は正三位、西山公は從三位にて御座被成によつて也、

〔有徳院殿御實紀附録二〕二丸におはしけるほどは、○徳川吉宗いかにも御喪中の御つゝ、しみうるはしく、少しも御遊樂のけしきなく、常に好せ玉ひし鷹のたぐひ、近づけ玉はざりしが、譜代の人々をばめして、まみへさせ給ふ、これ舊臣を待遇し給ふ盛慮なるべし、またこのほど、尾張水戸の兩